

# 米国ワシントン州シアトル市旧日本人街における日系人コミュニティの形成過程に関する研究 ―日本語学校の役割に着目して―

日本大学 学生会員 ○柳川 星

日本大学 正会員 阿部 貴弘

## 1. はじめに

近年、我が国のエスニック・コミュニティの集住する地区は、観光地としてのポテンシャルをもち注目を集めている。このエスニック・コミュニティとは「相互扶助に基づく、共通の言語・文化の人々のコミュニティ」と指す。こういった地区では、テーマパーク化して過剰な演出が行われたり、生活習慣の違いから問題が生じたりもしている。これに対して、米国のエスニック・コミュニティの集住する地区は多民族が同居し持続可能なコミュニティ形成に資する様々な施策が講じられ、都市を魅力付け多くの観光客が訪れている。

米国のエスニック・コミュニティが集住する地区の一つ、ワシントン州シアトル市には、1880年頃から多くの日本人が移民して日本人街が形成され大変賑った。太平洋戦争が開戦すると、1942年2月の大統領令 9066号により、日本人と日系アメリカ人(以下、日系人)は強制立ち退き・強制収容を強いられ日本人街は消失してしまう。しかし、終戦後、かつての日本人街には、一部の日本人・日系人が戻り、さらに日本以外のアジア系移民も移民した。現在、この地区は、International District として、エスニック・コミュニティの存在が都市を魅力付け、国際色豊かな観光地区になっている。

さて、シアトルの日本語学校は、全米最初の日本語学校として1902年に設置され、戦後も最初に日本語教育を再開した。各地に日本語学校は存在したが、シアトルのように建物が引き継がれて利用される事例は稀である。こういった日系人コミュニティに関する歴史的価値が認められて1982年にはNational Register, 2006年にはSeattleのHistoric Landmarkに指定された。また、2000年8月には日本の外務省から「我が国と諸外国との友好親善関係の増進」に貢献したとしてForeign Minister's Commendationを授与され、日本からもその活躍を認められている。シアトルの日本語学校は戦前戦

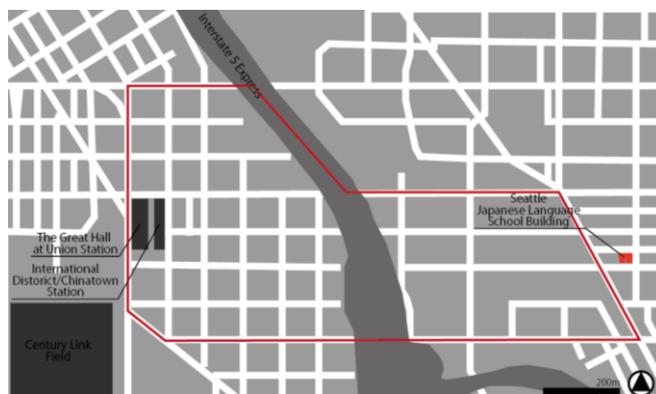


図1 日本語学校の位置(赤枠は International District) 後を通じて日本語教育という同じ役割を担いながら、現在、日系の文化コミュニティ施設として多様な活動の拠点に発展している。

日本語学校のコミュニティ形成における役割を明らかにすることは、戦争による断絶を超えて続いている日系人コミュニティの形成過程を明らかにするうえで重要であると考えられる。しかし、関連する研究<sup>1)~6)</sup>が地理学や建築学など多分野が行っているものの、戦前戦後を通じたエスニック・コミュニティの形成過程については言及しておらず、各施策・事業についても波及効果・課題について言及せず実態把握にとどまっている。

そこで本稿では、シアトルの日本語学校の役割に着目し、シアトル市旧日本人街における日系人コミュニティの形成過程を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

戦前戦後を通して日系人コミュニティがどのように形成されたかを、日本語学校が果たした役割から明らかにする。関連組織の変遷、教育活動の変遷、受け継がれている校舎建物の変遷の3視点から分析する。なお、使用した分析資料を表1に示す。

## 3. 結果および考察

関連組織、教育活動、建物の各変遷を図2に示す。

### 3-1. 関連組織

キーワード エスニック・コミュニティ, シアトル, 日本人街, 日本語学校

連絡先 〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学大学院理工学研究科まちづくり工学専攻 TEL : 03-3259-0485

E-mail : csak17008@g.nihon-u.ac.jp

表1 分析資料一覧

	タイトル	発行者	発行年(刊行期間)
新聞	日本人	日本人会	1901.2.16~1902.1.11.
	大北日報	大北日報社	1910.1.1~1942.2.
文献	日米関係在米日人発展史	藤賀与一	1927
	北米百年桜	伊藤一男	1989
	アメリカ春秋八十年	伊藤一男	1982
	日系移民人名辞典 北米編(全3巻)	日本図書センター	1993
	米国西北部日本移民史	竹内幸次郎他	1994
	日本人アメリカ移民史	坂口満宏	2001
	Sento at Sixth and Main: Preserving Landmarks of Japanese American Heritage	Gail Dubrow	2004
	Omoide IV, V, Revisited	Nikkei Heritage Association of Whashington	2005, 2011, 2011
	初期在北米日本人の記録北米編第96冊	奥泉栄三郎	2007
	HUNT HOTEL	Japanese Culture & Community Center	2016
データベース	National Register Inventory Nomination Form."Kokugo Gakko or Seattle Japanese Language School"		1982
	Landmarks Preservation Board (Seattle Japanese Language School 1414 S.Weller St.)		2006
	Library of congress	アメリカ議会図書館	-
	DENSHO	日系人の歴史ポータル	-
Web	Japanese American National Museum	全米日系人博物館	-
	Japanese Culture & Community Center	Japanese Culture & Community Center	-

3-1-1. 日系人組織

シアトルにおいて日本人会は、諸説あるが1899年頃組織され始め、演説会の開催や日本社会とのつなぎ役等をおこなっていた。さらに、1902年に後の日本語学校である日本人会附属小学校を設立した。1907年、ワシントン州日本人会と改称され、個人会員制から県人会等各団体の代表者会員制に変わり、部局制になってその一つ教育部で日本人附属小学校を国語学校に改称して扱った。1908年には国語学校の運営はワシントン州日本人会から独立して組織されるようになる。その

後ワシントン州日本人会は、組織の改編をくり返しながら1941年まで組織された。

戦後は、1949年には仏教会でシアトル日系人会がソーシャルサービス組織として設立された。2002年には、Mamiya Ron氏(シアトル市民裁判所裁判官), Kip Tokuda氏(元国家議員), Lori Matsukawa氏(アナウンサー)の3名がNikkei Heritage Association of Washington (NHAW)を結成した。

以上より、日系人組織は戦前戦後で異なる組織が形成された。

3-1-2. 日本語学校運営組織

国語学校は1908年独立した教育機関になると、学務委員会、国語学校維持会を組織し、PTAも存在した。

戦後、日本語学校として、シアトル日系人会が国語学校後援会を組織して1956年に日本語教育を再開した。

2003年にNHAWはJapanese Cultural & Community Center of Washington(JCCCW)という活動をはじめ、2004年に日本語学校と協力関係を結び日本語学校の運営を担い、日系人のみならず日本文化に関心を寄せる人々のために様々な活動を行っている。

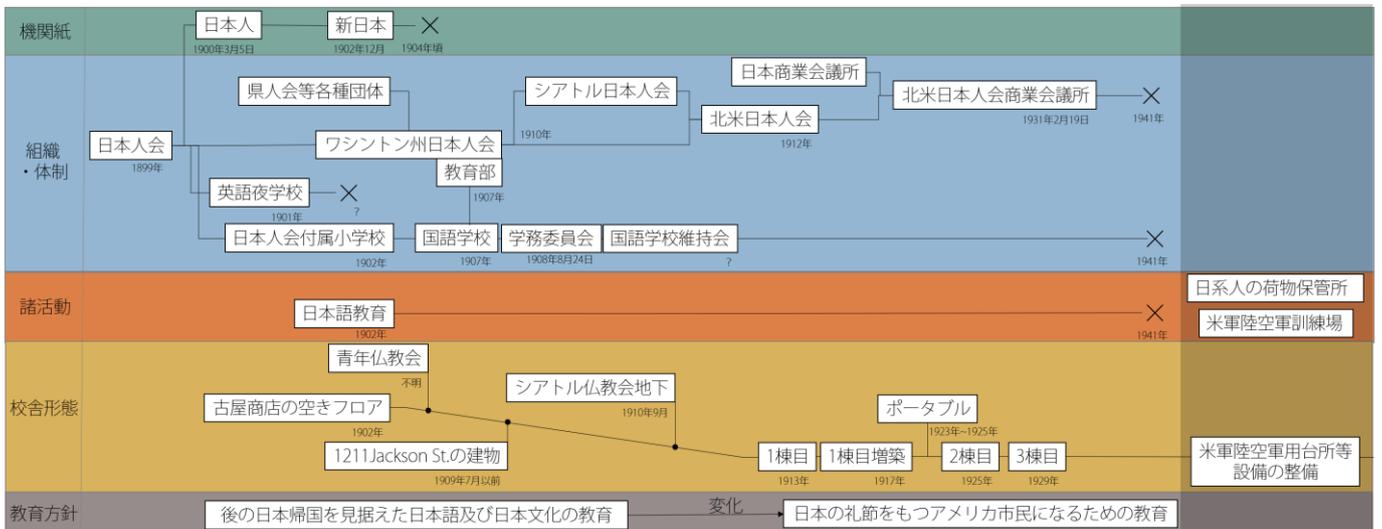


写真1 2017年現在の日本語学校

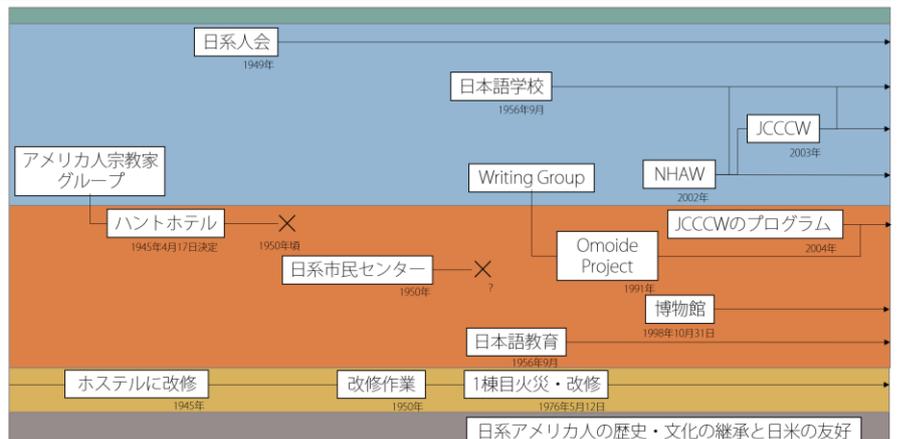


図2 日本語学校関連変遷図

以上より、日本語学校の運営組織も戦前戦後では異なる組織が運営しているが、ともに設立には日系人組織が関わっていた。

### 3-2. 教育活動・内容

#### 3-2-1. 日本語教育

戦前は、アメリカで生まれた二世や三世が市営の学校の放課後に日本語を習いに通った。

設立検討時の新聞には「永住の目的を有せざる我在留同胞の子弟は日本的教育の必要あるは謂ふ迄もなし、(中略) 小学教育を外人に一任し去るは大に反省を要すべき一問題にあらずや、(中略) 吾人は切に當市の有力者に望む是等少年の將來を■りて適宜なる小学教育を授くるの方法を講ぜられんとを、」とあり、後に日本へ帰ることを前提として、日本人の子供に日本語に限らない日本的教育を行うことを目的にしていた。1905年頃には日本語と日本文学を、その後は、日本語と日本の規律・歴史・生活様式までも教えた。

第一次世界大戦が終わり排日運動の活発化に対して1919年に日系人コミュニティ内で米化運動が起こったことで、1921年に教科書は米国で出版することにした。

1930年代には、「1. 日本の文化を学び、いつも正しい日本語を話すこと 2. 良いマナーを身につけ、目上の人を敬い、きっちりとした綺麗な服を着ること 3. 何事にも正しくあり、良いアメリカ市民になること」ということが校訓に掲げられた。当時校長を務めていた中河頼覚氏は、「異国に生活している私どもは、もっとも礼節が大切なことを痛感した」として「日米作法の常識」を1937年11月5日に発行し日本語の習得と日本の礼節の修学に用いた。

戦後は、1956年9月に土曜のみ再開し、現在では水・木曜日に大人、土曜日に子供向けの日本語の授業が行われている。生徒は日系人に限らず、授業内容は語学教育に重点が置かれるなど、戦前から変化している。

以上より、日本語学校は戦前戦後共に日本語教育を行っていたが、その対象者は日系二世・三世に限られていたのが日系人に限らない様々な人へと変化し、さらに授業内容は日本の礼節を重んじた教育から、日本語の習得を重視した教育へ変化していた。

#### 3-2-2. その他の活動

戦前の国語学校では運動会がピクニックや学業成績発表等とともに行われ、生徒、教員、両親や友人までも集まる日系人コミュニティの主要なイベントだった。

1911年ころから行われ、1930年代には5月最終日曜日に開催される大イベントになる。生徒たちは1カ月前からダンスや体操の練習を行った。母親は、お弁当作りに力を入れ、友人同士で分け合うなど交流がされた。

また、シアトル周辺地域にもシアトルの国語学校の教員が授業を行い、日本の外務省とも関わりがあった。

第二次世界大戦の強制収容時には、校舎の一部に収容所まで持っていけないものを保管し、その他の部分は連邦政府が陸空軍のトレーニング場として利用した。

終戦後、日本人および日系人はシアトルへ帰ることが許されたが、当時米国西海岸地域は住宅の入手が困難だった。これに対し、戦前から日系人コミュニティと関わりがあった宗教家が特に尽力して1945年4月17日シアトル教会評議会で話し合われ、国語学校が帰ってきた日系人を受け入れた。この時の滞在場所としての国語学校は、戦争中滞在していた収容所にちなんでハントホテルと名付けられた。ここで1950年までにおおむねの家族が新しい住環境を整えた。

1997年には公衆向け博物館を校内に設置する計画がされ、1998年10月31日に開設し、日系人の歴史や文化についての展示が行われている。

2004年には、JCCCWにより一世の生存者がわずかになったことで機運が高まり、日系人コミュニティ独自の文化センターとして日本語学校でその役割を担うようになる。1970年と1973年に同様の計画がされるが実現されず、念願のことだった。

現在、Seattle Japanese Language School (日本語学校)の他に、Community Class (柔道, 合気道, 空手, 少林寺, 太鼓)や歴史・遺産プログラム (Hunt Hotel, Northwest Nikkei Museum, Omoide Project), サマーキャンプ, イベント (Tomodachi Luncheon, Kodomo no Hi, All Things Japanese Sale, Bunka no Hi, Mochitsuki) といったプログラムが実際に行われている。プログラムの一部は、キング郡に付随する「4 Culture」や、国の政策である「Historic Preservation Fund (1976) —Japanese American Confinement Sites Grants」や「Kip Tokuda Memorial Washington Civil Liberties Public Education Program」等の補助金をうけている。Omoide Projectは最初、4人の日系人ライティンググループが始めて Omoide シリーズの書籍を作っていたが、2004年10月からJCCCWで打合せを行いながら OmoideIVを完成させ、さらにワシントン州の公立教育を監督する機関「Office of

Superintendent of Public Instruction」に管理されている。また、シアトルに兵庫県ワシントン州事務所が所在することにちなみ、2016年のKodomo no Hiでは兵庫県についての展示も行うなど、日本との関わりにも寄与している。

以上より、戦前の国語学校においては、日系人コミュニティに対して活動を行っていた。特に運動会は、県人会をはじめその他の日系団体の枠にとらわれない日系人コミュニティの形成に寄与したと考えられる。戦後は、日系人に限らない様々な人に日系人の歴史や文化を保護し伝えようと活動されており、戦前とは活動の対象者や内容に変化があった。

### 3-3. 校舎

設立計画段階では、日本人会の集会在夜間に時々行われる場所を使って小学校を設立しようと日本人会は提案している。シアトル日本語学校は、当初「日本人会小学校」として1902年7月に古屋商店の空きフロアに設置され、その後校舎建設まで3度場所を移転する。

1907年に国語学校と改称され、この頃から校舎建設について生徒数の増加をうけて議論され、1908年にワシントン州日本人会（前日本人会）で校舎建設に尽力するための学務委員会を設置する。その後、1911年に新校舎建設が決定、建築委員会を設立して、シミズ・スエキチ氏が計画をし、大工と配管工も日本人が行った。建設資金は日本人同胞の個人・団体から寄付金を集め、日本館ホールで行われた演奏会等の収益も寄付された。用地は建設決定当初Edward L. Blaine氏(シアトル市議員、宗教家)から借り入れる方針だったが、厚意に感謝しつつも氏の死後の相続では同様に貸してくれるとは限らないと懸念し、永久事業として日系人総出で大金をはたいて建設することもあり、費用が増えなくても先を見据えて他の土地を購入して権利を取得し建設することにした。この決定には新聞「大北日報」にて1912年7月1日に問題提起され、9日に17人が参加して国語学校臨時商議委員会を実業倶楽部で開催した。実行委員会に高橋（徹）、吉岡、藤井、隈元、篠原の5名が就き、3,350ドルでの土地の買収とBlaine氏とのリース解約等を行った。また、校舎の側に運動場を設け、器械体操用鉄棒やブランコ等を市内の小中学校を参考にして設置した。こうして1棟目の校舎が1912年12月7日に完成し、1913年1月に学校として利用を開始した。

さらに生徒数増加を受け、増築・新築を行った。1917

年11月には7,150ドルで寺前プラマが請け負い建築家のRobert Brownが1棟目の校舎の北側rear wingを増築する計画を作成・建設した。1923年から2棟目が完成する1925年までは、John Hay Schoolからポータブル式の校舎を購入して対応した。2棟目の建設は、Sievert Bergesenが設計したが建築審査申請前に死亡したためワシントン大学で建築を学んだKichio Allen Araiがその後を引き継いだ。3棟目は1929年に建設された。

戦後、日本語学校への改修作業は、お戦前の北米日本人会商業会議所の残された資金を利用して行うことが日系コミュニティの会議で決定し、日系人会により行われた。

以上より、校舎建設に際して設立の是非をはじめとした合意形成や、用地問題、技術者の発掘を経て組織の人脈や仕組みが拡充された。

### 4. まとめ

以上のように、日本語学校は戦前の校舎建設が組織の人脈や仕組みの拡充に寄与していた。また、戦前戦後を通して日本語教育を行っているがそのカリキュラムや諸活動は、対象者・内容ともに変化していた。

本稿では、日本語学校の変遷を明らかにしたが、その成果や課題にまで言及できていない。今後、他の施設・組織についても調査・分析を行い、比較・関連付けながら研究を進めていく。

### 参考文献

- 1) 竹沢素子：「日系アメリカ人におけるエスニシティ再生とアメリカ化」, アメリカ研究 27, 1993, pp. 171-188, pp.227-228
- 2) 杉浦直：「エスニック・タウンの生成・発展モデルと米国日本人街における検証」, 季刊地理学=Quarterly journal of geography 63(3), 2011, pp.125-146
- 3) 杉浦直：「シアトルにおける日系人コミュニティの空間的展開とエスニックテリトリーの変容」: 人文地理 48(1), 1996, pp1-27
- 4) Gail Dubrow : Sento at Sixth and Main: Preserving Landmarks of Japanese American Heritage」, Smithsonian Books, 2004
- 5) Arisa Nakamura : 「Stories of Chinatown-International District from Multiple Cultural Backgrounds」, 2016
- 6) 村山顕人他：「シアトル市ダウンタウンの空間形成を巡る議論と活動の展開過程」, 都市計画論文集 36 巻, 2001, pp.307-312